
不思議の国の、

桐原草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の、

【Nコード】

N4912BA

【作者名】

桐原草

【あらすじ】

「大泥棒・・・」「色は・・・」の続編ですが、きつと読んでなくても大丈夫。ナイスバディだけど色気がないフジコちゃんと、コスプレしたコロンボ似のクマさんの助教授コンビのお話です。フジコちゃんとクマさんの元に次から次へといろいろな人が訪れて・・・今回は6回ほどの短期連載を予定しています。今回フジコちゃんはその鋭い言葉で何人の心をえぐるのでしょうか。そしてクマさんは軽いノリの大阪弁で言いくるめることができるのでしょうか。

この小説は「すぴばる」サイトにも投稿しております。

シロウサギはナイスバディの夢を見るか？

「こんにちは、石川センセ、いますか」

ちよつと軽そうな声で、フジコちゃんの研究室のドアを叩いているのは、石川ゼミの桐原だ。

「おるで、入ってきい」

そう答えるのは、相変わらずよれよれの白衣姿のクマさんだ。

「失礼しまゝす」

入ってきた若い男を見て、

「あら、イケメンだけどちよつと残念な桐原クンじゃないの。何の用？」

と返したのは、我らがフジコちゃんである。

「フジコせんせ、ちよつと残念な、って、ナニそれ？みんないつてるんすか？」

「そうよ、かつこいいけど残念な桐原クン。石川ゼミに入った時点で終わってるわね。どうせならウチにすれば就職もできるのに。」

フジコちゃんは相変わらず容赦ない。

「フジコせんせのとき、全然専攻違いますやん。それに親のコネで、地元就職決まってますから。」

「そやで、コイツ、ええとこのボンヤからな。私立中学の先生になるんや。」

「イケメンの上に、お金持ち・・・」

フジコ先生は何かを振り切るように、軽く頭を振った。

「それはええとして、オマエ、何や、それ？」

クマさんが指差したのは桐原が抱えている白い・・・ウサギだった。

「鍋にすんのか？」

クマさんが真面目な顔で問いかける。

イケメン桐原も真面目な顔で

「うまいんすかね？」

「アンタたち、やるんなら外でやってよ、外で！」

金切り声をあげたのはフジコだった。

「外で拾ったんすよ。フジコせんせの窓をじいつと見てたから、フジコせんせが飼ってるのかと思って、連れて来たんすけど。」
違うみたいっすねといいながら、桐原はウサギをなでている。

「研究室では飼えんやろ。」

これまたのんびりムードのクマさんに、桐原は

「いや、田中教授はウーパールーパーにザビエルって名前つけて、かわいがったはりますよ。」と律儀に答えている。

そのとき、ウサギは桐原の手から飛び出して、フジコの後ろの窓に上がってしまった。

「あちゃあ、嫌われてしもた」と頭をかく桐原であった。

「ちょっと、ここはどこなの？ 大阪？ 動物園？ ちがうでしょ、東京で、食料科田中研究室。古文専攻の桐原くんが何しに来たの？」

イライラした声上がる。

「センス、つれないなあ。僕、センスのファンやのに。」

「せやで、アンタ、イケメン好きやんか。」

「それに僕、古文専攻とちやいますよ。卒論はマニアな泉鏡花です

もん。

石川センセは来るもの拒まずやから、入れてもらたんです。」
と、真面目な顔で応じている。

それとこれとはちがうでしょと呟くフジコに、桐原が、

「石川先生に用がありますねん。いや違った、ありますです。うー、東京弁はむつかしいなあ。」

「地元に戻っても教室では標準語つかわなあかんで、仮にも国語の教師やる。」

とクマさんがゼミの担当教諭らしい言葉を吐けば、すかさず桐原が
「センセかて、使^こたはりませんやん」
と突っ込んだ。

就職先の中学から卒論送れ言うて来たんすけど、製本はいつくらいにあげますかねえ。

と相談を始めた二人に溜め息を吐きながら、
イケメンだけどやっぱりちよつと残念だわねえ、大阪弁くらい克服しなさいよ、

とひとりごちるフジコちゃんであった。

「・・・あ、そう言うたら、フジコセンセ、『ルパン三世』の峰不二子とスリーサイズおんなじ、ってホンマですのん？」

とクマさんとの話がついたらしい桐原が問いかけた。

「あら、そんな噂があるの？」

まんざらでもなさそうなフジコちゃんを尻目に、クマさんが訊ねる。

「あっちのフジコちゃんはいくつなんや？」

「上から99・9 55・5 88・8 ですよ、クマセンセ。オトコノコの常識ですやん。」

嬉しそうに語る桐原であった。

「他はようわからんけど、上は5センチくらい足りへんのと違うか？」

・・・一瞬の沈黙が研究室内に充満する。
誰も何も話さない。

「ア、アンタ、何言ってるのよ！そつ、それに、手っ！ 右手っ、見るのやめなさいよっ！」

沈黙を破ったのは涙目のフジコちゃんであつた。

「フジコ先生、いらっしやいますか？

神代食品の依田よたです。」

異様な空気をぶったぎるように、能天気なノックが響く。

「・・・いるわよ、入ってきてください。」

明らかにほっとした調子のフジコが応じる。

「あ、それじゃ、僕はこれで。石川先生、卒論の件、よろしく願います。」

にやにや笑いが止められません、といった顔で桐原が出ていく。

フジコはその後ろ姿に何か言いかけてはやめた。

なんだか、フジコちゃんの魅力的なボディが、一回り縮んでしまったようだった。

以下、次回へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4912ba/>

不思議の国の、

2012年1月13日18時01分発行